

自分の町のよさを発信できる子供の育成

ー地域の農業との関わりを深める探究的な学習を通してー

登米市立東郷小学校 千葉 優樹

1 はじめに

昨年度までの自身の授業実践から、総合的な学習の時間の実践を重ねる中で、単元計画を進めていくだけでは、一部の児童の意欲の高まりに停滞が感じられ、探究のサイクルがうまく進んでいかないという課題を抱えている。これは自身の探究的な学習過程への理解が不十分であることが考えられる。

今年度、担任する児童はこれまで、生活科の町探検で学校周辺を歩き、商店や公民館、寺院などを訪問したり、そこで働いている人と話をしたりしてきた。分かったことや気付いたことを地図にまとめる活動を行うなど自分たちの地域のことについて学習してきた。

総合的な学習の時間を始めるに当たり、探究課題「地域の農業（米・野菜）」に対して児童がどのような印象を持っているのかを把握するために下記のような実態調査を実施した。

表1 総合的な学習の時間における意識調査
(5月24日実施 18名)

		とても 思う	まあまあ 思う	あまり 思わない	思わない
1	東郷地区・南方町の自慢を教えてください。(複数回答) ・地域の人が優しく、親切である(13人)・自然が豊かである(3人) ・お米や野菜がおいしい(1人)・田んぼがたくさんある(1人) ・公園がたくさんある(1人)・生き物がいっぱいいる(1人)他				
2	東郷地区・南方町のお米はおいしいですか。	16人	2人	0人	0人
3	東郷地区・南方町の野菜はおいしいですか。	9人	8人	1人	0人
4	グループの中で、自分の思いや考えを友達に伝えることができますか。	8人	7人	2人	1人
5	クラスの中で、自分の思いや考えを友達に伝えることができますか。	7人	8人	2人	1人
6	「総合的な学習の時間」は楽しみですか。	16人	2人	0人	0人

自分の願いや思いを伝えることに関して、グループでもクラスでもおおむね自信を持って行えているが、3名の児童は苦手と感じている。また、今年度から学習する総合的な学習の時間に対して、生活科での充実した経験から「探検を通してもっと多くのことを学びたい」、「様々な教科で学んだことを生かして新しいことに挑戦していきたい」等の願いを持ち、多くの児童が楽しみにしていると捉える。

地域についての調査では、普段の生活や今までの学習の際に接してきた地域の人に対して、親しみを感じ、優しく、親切だという思いを持っていることが分かった。その一方で、地域の米や野菜に関して

おいしいという印象を持ちながらも、地域の自慢として米や野菜をあげる児童はほとんどいない。普段の生活の様子からも、多くの児童は田や畑がたくさんあることを当たり前のことと捉えており、詳しく調べようとしたり、農業に従事している人々の努力等について考えたりすることがない。そこで本研究では、探究的な学習過程を設定し、米作りや野菜作りを通して、作り手の苦労や工夫について理解させる。また、地元農家への聞き取りやJA職員の話を通して、農業に対する思いや願いに触れることで、南方に受け継がれてきた農作物のよさに気付かせる。そうすることで児童が地域の農業を主体的に知り、探究していこうとする態度や、自分の町のよさを発信できる力を身に付けることにつながると考え、本主題を設定した。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究では、地域の農業との関わりを深める探究的な学習を通して、児童一人一人が、他者と協働して主体的に学習活動に取り組めるようにする。その上で、児童自身が自分の町のよさをまとめ表現していくために、以下の手立てを講じていく。

(2) 研究の手立て

① 地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせる支援の工夫

- ・地域と関わる農業体験活動を充実させることで自分の思いや願いを持たせる。
- ・思考ツールを用いて情報を分析・整理することで、必要な情報に的確に捉え、一人一人が明確な考えを持てるようにする。
- ・製作や物作りを行う際に、地域の人や専門家から助言を受ける場面を設定することで、協働して取り組むことの大切さや地域社会に参画する喜びを実感できるようにする。

② 学習過程を探究的な活動にするための工夫

- ・農業体験活動を重視し、農業との関わり方や出会わせ方などを工夫した課題の設定をする。
- ・目的を明確にし、課題解決のための情報の収集を主体的に行えるようにする。
- ・児童自身が収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして、吟味できるようにする。
- ・児童が相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、学んだことを表現したりできるようにする。

(3) 研究の方法

第3学年の児童を対象に、前述した手立てを指導過程に位置付けて授業実践を行う。手立てに関わる児童の様子やノート、プリント等への記述内容、授業後の振り返りの記述、探究課題への意識調査を用いて、手立ての有効性と児童の変容から自分の町のよさを発信できる子供の育成につながったのかを検証していく。

3 授業実践Ⅰの取組

(1) 単元について

小単元名

「ふれてみよう 感じてみよう 南方の米と野菜」

本単元は、全体計画に定めた探究課題「地域の農業（米・野菜）」を踏まえて構想した単元である。「地域の農業」について学ぶことは、地域の主産業である米作りについての理解を深めるだけでなく、地域そのものを理解することにもつながる。そして、何よりも探究的な活動を通して、米作りや野菜作りに携わる人々の苦労や喜び、願いなどを感じ取ることができると考えた。また、学んだことを表現する場を工夫することによって、お世話になった地域の人に感謝し、米や野菜を大切にしていこうとする思いを高め、たくさんの人が米作りや野菜作りを支えている地域への愛着を深められる単元である。

事前の実態調査から児童は、農業に対しての課題意識を十分に持っていないことが明らかになったため、ウェブマッピング（イメージマップ）を活用して、南方の農業に対する知識を可視化し、詳しく分からない状態であることを確認した。そこから、身近な存在である家族に南方の農業についてインタビューする必要性を持たせた。その情報を、KJ法で整理し、南方の農業についての知識を深め、もっと農業について知りたいという意識を持たせることができた。また、児童は前時までの学習で塩水を利用しての種籾の選別方法を農家の方に教わったり、バケツを利用しての苗の栽培方法をJAの方に教わったりするなど米についての体験的な学習を行った。

そこで本時は、JA職員や農家へのインタビューを通して収集した情報を表に整理することで、米作りに関わる農家は、効率性や生産性だけを大切にしているのではなく、米に愛情を持って大切に育てていることを考えさせるように計画した。しかし、単元を進めていく中で、主として扱う米の生長に関して児童の興味や関心が高まっていないことに課題を感じたため、学習材であるバケツ稲に焦点を絞って、実践Ⅰを進めた。本時は、バケツ稲の観察を通して、もっと知りたいと感じたことを、グループの仲間と協力して情報収集させた。また、児童が感じた疑問から、情報収集させることで、もっと調べたい、もっと伝えたいという思いが膨らむようにした。情報

端末などのインターネット機器の使用方法や今まで地域の農業について教えて下さった人へのインタビュー方法を示すことで、より主体的に活動を行うことができた。

(2) 実践Ⅰの手立て

【視点1】地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせる支援の工夫

- ・前時までの活動写真を提示し、これまで関わってきた地域人材の活用を促すことで、農業についての知識習得と意欲的な活動ができるようにする。

【視点2】学習過程を探究的な活動にするための工夫

- ・フローチャートを活用し、本時の活動が次回以降の学習にどのようにつながるか見通しを持って活動できるようにする。

(3) 研究実践Ⅰの概要と結果

本時の授業の手立てである前時までの活動写真を提示し、地域人材の活用を促すことで、米作りで疑問に感じたことや関わりのある地域の方に尋ねたいという思いを児童に持たせることができた。それによって、「電話をかけるのが楽しみ。早く知りたい」という姿から、米作りについて自ら課題解決しようとする探究的な活動へとつなげることができた。また、グループ活動に入る前に、フローチャートを活用し、本時の活動が次回以降の学習にどのようにつながるか見通しを持たせたことで、発表に向けもっと詳しく調べようと意欲的に学習を進める姿につながった。

しかし、当初計画していた単元の計画から、本時の学習過程を直前に修正・変更した。バケツ稲に限定して調べ学習を進めたことは、本来の目的である、自分の町のよさを知る活動から大きくかい離してしまった。実践Ⅰが計画していた学習過程どおりに実施できなかった大きな原因として、単元計画に、課題設定の場面が不十分であった。課題設定までの時間が十分でなく、教師が一方的に課題を与えてしまう形になってしまったことで、授業の感想や普段の生活の様子から児童の興味・関心が高まっていない状況が伺えた。本研究の目的である、地域の農業との関わりを深める探究的な学習を通して、児童一人一人が、他者と協働して主体的に学習活動に取り組み、学習を探究的に進めていく姿には程遠い状況になってしまった。

4 授業実践Ⅱの取組

(1) 実践Ⅰを受けての修正点

今回の実践Ⅰの授業を通して感じた課題点を基に、単元計画に【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】の過程を再度設定し直した。特に【課題の設定】で児童が自ら課題意識を持ち、その意識が連続発展するように、単元計画を再考した。児童が探究的な学習を進めていくためにも、課題設

定時の体験活動に時間を十分確保することで、児童の思いや願いを充実させ、児童が問いを立てるまでの過程を大切にできるよう工夫した。また、学習対象との関わり方や出会わせ方を工夫した単元計画を再考し、そこで児童が感じた思いを大切にさせながら、探究活動をスタートさせた。

(2) 単元について

小単元名 「登米市の米とやさいを知ろう」

本単元は、全体計画に定めた探究課題「地域の農業（米・野菜）」を踏まえて構想した単元である。単元1「ふれてみよう感じてみよう南方の米と野菜」では、道の駅見学やバケツ稲づくりなどの体験を通して「地域の農業」について学び、地域の主産業である米作りについての興味・関心を高めた。

単元2「登米市の米と野菜を知ろう」では、米作りだけにとどまらず、野菜の栽培や農家へのインタビュー活動などの体験活動や探究活動を通して、米作りや野菜作りに携わる人々の苦労や喜び、願いなどを感じ取ることができると考えた。また、学習活動を進めて行くことで、地域そのものを理解することにもつなげた。

単元3「登米市の米や野菜の良さを伝えよう」では、地域で育てている野菜のよさに気づき、その良さを広げていくために、伝え方をどうすればよいのかを考えさせた。学んだことを表現する場を工夫することによって、お世話になった地域の人に感謝し、米や野菜を大切にしていこうとする思いを高め、たくさんの人が米作りや野菜作りに関わっている地域への愛着を深められる単元である。

(3) 実践Ⅱの手立て

【視点1】地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせる支援の工夫

- ・道の駅見学時の写真を提示し、駅長の話などから知った特産野菜についてウェブマッピングで振り返ることで、地域の農業についての更なる知識習得と意欲的な活動ができるようにした。

【視点2】学習過程を探究的な活動するための工夫

- ・特産野菜についての収穫量（県、全国でのランキング）を提示することで、「なぜ、こんなにも多く収穫できるのか」を児童に問い、考えさせることで、地域の野菜の良さについてもっと調べたい思いが膨らむようにした。

(4) 研究実践Ⅱの成果と課題

① 地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせる支援の工夫

道の駅見学時の写真やウェブマッピングを提示することで前時の活動を想起させ、一人一人の児童に登米市の野菜をもっと調べてみたいという思いや願いを持たせることにつなげた。特に、道の駅で販売されていた野菜を手にとって確認する活動で、「フルーツのにおいがする」「ニラっていいにおいがするね」のように、自分の考える野菜のイメージとの

相違を感じることによって、登米市の特産野菜に今まで以上に関心を持ちながら授業に取り組むことができた。



図1 野菜を確認する活動の様子

② 学習過程を探究的な活動にするための工夫

特産野菜についての収穫量（県、全国でのランキング）を提示することで、登米市の野菜について、興味を持たせることができた。しかし、ランキングの順位を予想する際、何を根拠にすべきか戸惑う児童が多かったことから、なぜ順位が上位なのかという疑問を持つ児童が少なかった。もっと登米市の野菜について調べてみたいという思いは持ちつつ、どうやってたくさんの生産を可能にしているか調べたいなど明確な課題を持たせることができなかった。

5 研究の結果と考察

(1) 実践Ⅱ以降の児童の変容

特産野菜についてどのような種類があって、どのような育て方をするのか、収穫後はどこに運ばれるかなどの疑問を、本やインターネットを使って、進んで調べる様子が見られた。また、情報が見付からない場合には、農家や専門家に聞いてみるという方法を考え、学習を進めることができた。さらに、調べて分かったことを2年生に教えてあげたいという思いが児童から出された。

(2) 児童の変容による検証

① 抽出児童aの変容

抽出児童aは、当初はバケツ稲の世話を怠っていたが、バケツ稲の栽培を通して、専門家から思いやりを持って育てることが大切であることを学習し、こまめにバケツ稲に水やりをする様子が見られるようになった。米に関して、インターネットを活用して進んで調べ学習を行ったり、米の生長の変化を細やかに確認に行ったりするようになった。野菜の産地を調べる活動でも、道の駅で販売している野菜を全て調べるなど、主体的に学習に取り組む様子が見られるようになった。

② 抽出児童bの変容

抽出児童bは米の収穫量のランキングを提示した授業の際は、「登米市の米の収穫量が宮城県1位のことにびっくりしたし、うれしかった」という記述があった。それ以降の授業では米について本で調べたことをみんなに教えたり、苦手としていたグループ活動で、積極的に自分の考え

を発言したりする様子が見られるようになった。

③ 考察

抽出児童 a と b の学習の様子から地域の農業に対しての思いや願いが生まれ、学習に対する主体性が高まっていく姿がうかがえた。農業体験を充実させたり、地域の人や専門家との関わりを増やしたりしたことで、児童の主体性を引き出し、課題解決に向かう気持ちにつながったと考えられる。

(3) 意識調査による変容の検証

5月と11月の実態調査の結果を比較すると、「東郷地区・南方地区の自慢を教えてください」という質問1に対して、「お米や野菜がおいしい」という1名の回答から「宮城県1位（生産量）のお米がある」「地域にはいろいろな種類の野菜がある」といった農業に関する自由記述の回答が10名に増えた。道の駅見学など、校外学習を通して、調べ学習やインタビュー活動を行うことで、たくさんの人が農業に関わっていることや丁寧に栽培や販売が行われていることを知り、地域の農業に対して誇らしく感じるようになったと考えられる。

「東郷地区・南方地区の野菜はおいしいですか」という質問3に対して、「とてもそう思う」と回答した児童は5名増えた。地域の野菜に関する学習を積み重ねた結果、地域の野菜に対する知識が増え、手間暇をかけ、安全・安心で、思いの込められた地域の野菜はおいしいと感じる児童が増えたと考えられる（図2）。

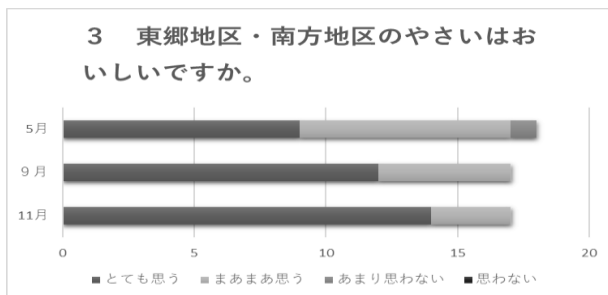


図2 意識調査の結果

また、「グループの中で、自分の思いや考えを友達に伝えることができますか」という質問4に対して、「あまり思わない」「思わない」と否定的な回答をする児童がいなかった。探究的な学習を通して、児童が主体的にグループでの学習を進めてきた成果だと考えられる（図3）。

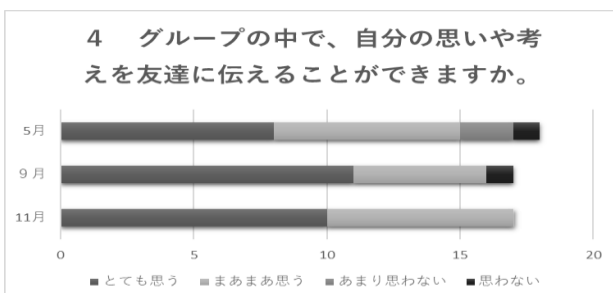


図3 意識調査の結果

6 おわりに

(1) 研究の成果

① 地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせる支援の工夫

地域と関わる農業体験活動を充実させることや地域の人や専門家から助言を受ける場面を設定することで、地域の農業に関わろうとする思いや願いを持たせることは有効である。また、関わりあった人と繰り返し交流を持つことで、親近感や安心感が生まれ、疑問に思うことを質問する回数が増えことから児童がより主体的に学習に向かうようになった。

② 学習過程を探究的な活動にするための工夫

農業に関わる体験活動を重視し、農業との関わり方や出会え方などを工夫した課題の設定をすることは、今まであまり知らなかったものに興味を持たせることに対して有効であった。また、【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】の過程を単元に適切に配置することは、児童が主体的かつ協働的に学ぶのに有効であった。学んで得た知識を、他の学年に発表をした後、更に多くの人に伝えたいという言葉が、児童自身から出てきたことが成果であると考えられる。

(2) 今後の取組

今後は全学年の年間指導計画が、探究的な学習の過程を踏まえているか再度確認していく。特に【課題の設定】で児童が自ら課題意識を持ち、その意識が連続発展するようにする。また、年間指導計画を立案していく際には、学習活動の深まり具合に合わせていつでも連携・協力を求められるように日頃から地域人材との関係づくりを意識して行っていきたい。

【図表等の承諾について】

図1は授業実践での児童の活動の様子である。氏名を伏せ掲載することとし、児童の保護者から使用承諾を得た。

【引用・参考文献】

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料総合的な学習の時間 2020
- 2) 文部科学省：「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」2021
- 3) 小学館：『ゴール→導入→展開』で考える『単元づくり・授業づくり』2022
- 4) 小学館：「探究的な学びを実現する『生活・総合』の新しい授業づくり」2023